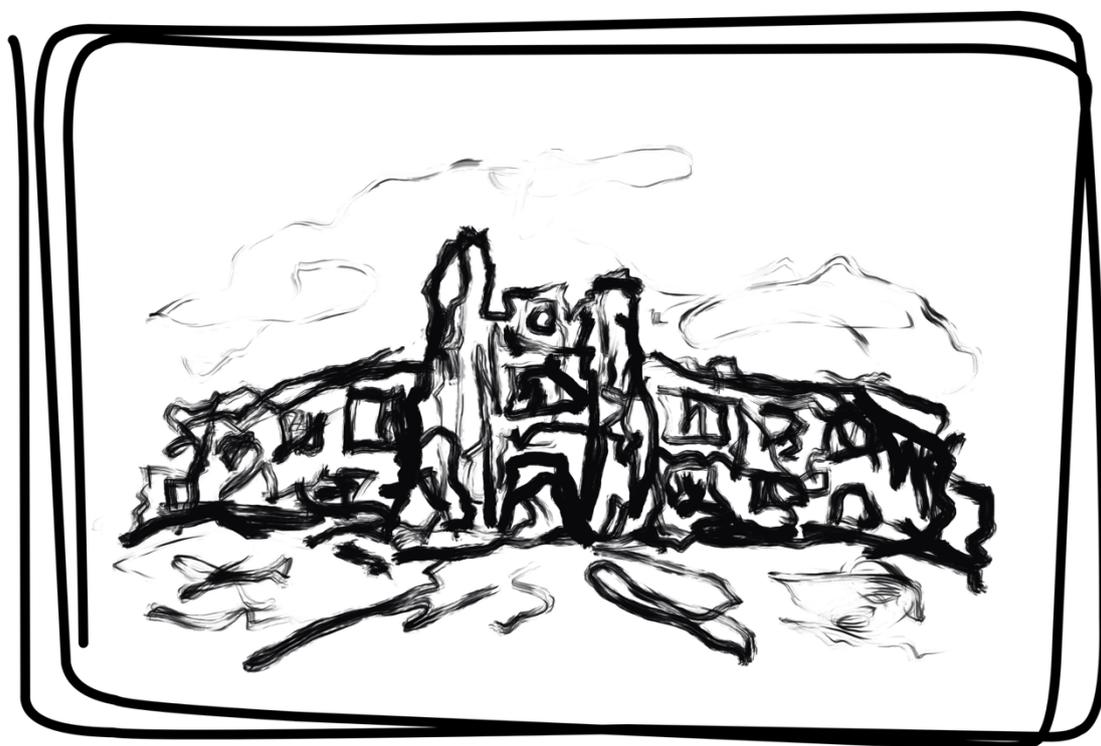


# 教育思想史学会 第35回大会



## プログラム

【会場】

立教大学池袋キャンパス

【会期】

2025年9月13日（土）・14日（日）

## 大会開催のご挨拶

本年度の学会大会を対面とオンラインのハイブリッド形式で開催できることを嬉しく思います。そのように述べると直ちに、「えっ、昨年度もそうでしたよね？」という声がすぐに返ってきそうな気がします。

2020年4月のことを思い起こしています。新型コロナウイルス感染症が拡大した特別な春のことです。4月8日の「非常事態宣言」から「3密」を避ける「新しい」日常生活が始まりました。人との接触を避ける時間を過ごすことを余儀なくされました。草花の手入れをするようになりました。毎日散歩をするようになりました。ほぼ欠かさず、一日に一度は翻訳に勤しみました。その理由について、最初は自分でもよくわかっていませんでした。今は少し理解できるような気がします。「キョウモ、オナジジカンガ、ナガレテイル。アシタモマタ、オナジヒガ、ヤツテクル」。ほぼ無意識のうちに渴望していたのは、実のところ、そうした感覚であったように思います。

得体の知れない何ものかに耐えるように過ごしつつ、しかし公のことで最も気がかりであったのは教育思想史学会の年次大会のことでした。当時、本学会の事務局長を担当させていただいておりました。経験したことのないパンデミック状況によって社会生活も一変しました。4か月後に迫る大会の開催はほんとうに実現できるのかという不安の日々でした。それまでのデフォルトであった「対面」形式の実施が難しいなかで唯一可能であると思われたのは、当時まだ不慣れであったオンラインを何とか活用して学会大会のプラットフォームを作ることでした。途方に暮れていたとき、ある人がちょっとしたヒントを与えてくれて、そこからアイデアを育てて実装していくための事務局スクラムを組みました。参照できるモデルがないなかで専門業者に頼らず学会大会のプラットフォームを形成したのは、4月から5月にかけての約2か月間。手探りでオンライン形式での大会実施の方法を追求したあのときの緊張感を、私は当時協力してくださった方々への感謝とともに忘れることはありません。

2023年度、まだいろいろと判断の難しい状況が続くなかで、前回事務局体制の熱意と努力によって対面形式の大会が復活しました。24年度もそうでありましたし、また今年度も対面での大会を開催します。思い返せば、これまで国内外で開催された「対面」の学会大会で教育思想史や教育哲学の尊敬すべき「アスリート」たちに出会いました。彼ら彼女らのパーソナリティは多様ですが、それにもかかわらずそこには共通する何かを感じられるのでした。その何ものかは、多くの場合、論文や著作の向こう側に隠れています。「対面」の大会は、表情や口調や言葉の間合いや振る舞い方を通して垣間見えるその何ものかに接する機会であり、自分にとってのロールモデルや理想の生き方を思い描く貴重な場でもあるのではないのでしょうか。以前から大会に参加いただいている方々には、久々のそうした感覚を思い出していただける機会になることを願っております。新型コロナウイルス感染症拡大によってオンライン形式が主流の学会大会開催が続いた数年間に学会デビューした若い方々にとっては、こうした「対面」形式の学会大会自体が新鮮かもしれません。

2023年度大会以降、もとの「平常運転」に、つまり「対面」のみの大会に戻ったというわけではありません。2020年度に制作した大会用プラットフォームはほぼそのまま現在の体制に引き継がれています。今大会もオンラインの長所も活かしながらの開催となります。このプラットフォームは

そう遠くない時期により利便性の高いものに置き換えられていくでしょう。そうしたポジティブな更新がこれからも続いていきますように。戦後 80 年を意識したシンポジウム、「アドルノ」「フェミニスト・ペダゴジー」、そして「市民教育」をめぐる三つのフォーラム、また八つのバラエティに富むコロキウム。今年度のレパートリーです。「車座の学会」にようこそ。

教育思想史学会会長  
山名 淳

## 大会日程

[1日目] 9月13日(土)

8:30	受付開始
9:00~11:30	<p>コロキウム1 [社会批判と教育学の関係を再考する—オスカー・ネクトを事例に一]</p> <p>コロキウム2 [日本における教育と技術への問い]</p> <p>コロキウム3 [発達論的時間概念の組み替えと高大共動システムの構築]</p> <p>コロキウム4 [「大正新教育」の辺境へ—地域・芸術・宗教に着目して—]</p>
11:40~12:50	ランチタイムセッション・昼食休憩
13:00~14:45	フォーラム1 [否定主義者としてのアドルノ像の再検討—理性批判の後に規範は語り得るのか?—]
15:00~16:45	フォーラム2 [フェミニスト・ペダゴジーの限界と転回：アフェクト理論がひらく教育空間]
17:00~17:45	総会・奨励賞授賞式
18:00~20:00	情報交換会※今年度から懇親会を情報交換会と改めることになりました(5号館・第2食堂「アイビー」)

[2日目] 9月14日(日)

8:30	受付開始
9:00~11:30	<p>コロキウム5 [民衆による知の生成を問う—戦後文化運動における「生活・記録・サークル」の思想史—]</p> <p>コロキウム6 [教養の弁証法? 『大正教養主義の成立と末路』合評会]</p> <p>コロキウム7 [没入・虚構・拍手——教育とコミュニケーション・再考II——]</p> <p>コロキウム8 [シモーヌ・ヴェイユの不幸の美化についての考察]</p>
11:40~12:50	昼食休憩
13:00~14:45	フォーラム3 [市民教育論における政治的リベラリズムの思想史—その批判から超克まで—]
15:00~18:00	シンポジウム [戦後80年とポップカルチャーをめぐる教育思想]

## 会場での Wi-Fi について

会場になる立教大学では eduroam もお使いいただけますが、大会当日、以下の時間は臨時に大学の wifi をお使いいただけます。

日時： 9 月 13 日（土） 08:00 ～ 18:30

9 月 14 日（日） 08:00 ～ 18:30

場所： 14 号館ロビーと 4 階から 6 階の各教室

### ■接続方法

無線 LAN の接続先に「rikkyo-guest」を選んでいただきますと、認証設定なしに接続可能となります。

上記の操作だけで接続は完了いたします。

ご不明の点がございましたらお問い合わせください。

## 戦後 80 年とポップカルチャーをめぐる教育思想

報告者：筒井晴香（実践女子大学）

渡辺健一郎（俳優、批評家）

企画・指定討論者：小玉重夫（白梅学園大学）

企画・司会者：渡辺哲男（立教大学）

「戦後 80 年」は、今年度多くの学会でとりあげられるテーマとなるように思われるが、教育思想史学会らしい、挑戦的・刺激的なアプローチとして、このたびのシンポジウムでは、過去に 2 回コロキウムで企画された「ポップカルチャーの教育思想」と「戦後 80 年」のリンクを試みる。ハイカルチャーを相対化し、ときに対抗的な視点も提供する機能がある「ポップカルチャー」をキーワードとすることによって、これまでにない議論を提供できればと考えている。そのために、今回は、報告者に、あえて教育学を専門としない非会員 2 名を迎え、会員である小玉重夫氏は指定討論者に回り、報告者の議論を教育学、教育思想史研究としてどう引き受けるか、相対化する役割を担ってもらうことにした。

報告者 2 名の報告の内容は下記のとおりであるが、直接「戦後 80 年」を主題としているわけではない。ただし、このことを意識した報告をお願いしているし、ふたつの報告に共通するキーワードとなる、「演劇」あるいは「現実と虚構」は、戦後（思想）史を再考するためのトリガーとなるはずである。先走って「教育」と絡めれば「推し活」や「観客」は、今日における「主体性」にまつわる議論と接続できるし、さらには、いかように社会に参加するか（社会運動の変遷）、情報技術と倫理という問題にも敷衍することができるだろう。これは一例に過ぎないが、2 名の報告と指定討論、さらにフロアの皆さんとの相互交流によって、刺激的なシンポジウムが生まれることを期待している。

筒井晴香氏は、哲学・応用倫理学・ジェンダー研究を専門としている。新興科学技術の ELSI（倫理・法・社会的課題）研究に取り組む一方で、ポピュラーカルチャーに関する批評・研究も行っており、近年はアイドルやキャラクター等を「推す」ことや「推し文化」に関して、情報技術の倫理や、現代のジェンダー・セクシュアリティ・親密性のあり方といった観点から、倫理的論点の検討を行っている。本シンポジウムでは、これまでに行った議論を紹介しつつ、特に若者や教育といった観点から、「推す」ことをめぐる倫理について検討する。「推し文化」や「推し活」に関しては、近年、批判や懸念の声も散見される。他方で、現代社会の諸局面におけるポピュリズム的な現象や風潮への批判を行う際に「推し活」という語に問題を集約させることは、様々な文脈の差異を捨象し、批判を若者叩き・女性叩きに横滑りさせてしまう恐れがないか、とも氏は懸念しており、その点についても試論的に展開する予定である。

渡辺健一郎氏は俳優であり、演劇研究の活動にも身を置くが、『自由が上演される』（講談社、2022

年)で批評家デビューも果たしている。氏は、演劇における観客の位置づけについて、歴史的、哲学的な捉えなおしを試みる。イマーシブミュージアムやVR機器を用いたイマーシブ体験など、近年イマーシブという語をよく目にするようになった。日本では「没入型」や「観客参加型」などと訳されるが、その源流は2000年頃、イギリスで発祥したイマーシブシアターにある。そこでは観客は、登場人物と交流するなど、物語に実際に巻き込まれていくことになる。観客はもはや受動的な鑑賞者ではなく、作品に能動的に関与する存在だとみなされる。しかし実のところ、舞台上と客席とが地続きである演劇において「観客の参加」とは一体何なのかを画定することは容易ではない。ジャック・ランシエールやクレア・ビショップなど、美学領域における「参加」をめぐる議論を参照しながらイマーシブシアターの特性を再確認することで、観客という存在様態の理解を深めることを目指す。

## 否定主義者としてのアドルノ像の再検討

### ——理性批判の後に規範は語り得るのか？——

報告者：安道健太郎（長崎総合科学大学）

司会者：野平慎二（愛知教育大学）

「アウシュヴィッツ以後」の世界で我々は、なおも批判の規範的前提を見出すことはできるのだろうか。本報告では、批判理論を代表する思想家の一人である Th・W・アドルノの社会批判の中に規範的契機を探ることでこの問いへの回答を試みたい。

アドルノに関しては、哲学的名著である『否定弁証法』（1966）のタイトルが示す通り、「否定主義」の哲学者というイメージが広く共有されているのではないだろうか。アドルノは、M・ホルクハイマーとの共著『啓蒙の弁証法』（1947）において、啓蒙の自己破壊的性格を明らかにしたことで知られている。同書に対しては、理性を道具的理性と同一視したことによって、理性に対する希望を放棄してしまったという批判が批判理論の外部だけでなく内部からも行われてきた。たしかに、『ミニマ・モラリア』（1951）における「偽りの中に正しい生はない」という有名な文言も「否定主義者」というイメージを裏付けているようにも思える。

J・ハーバーマスが『近代の哲学的ディスクール』（1985）の中で、『啓蒙の弁証法』を「最も黒い本」と表現したことに代表されるように、少なくとも批判理論の主流派のアドルノ解釈においては、上記のような「否定主義者」としてのアドルノ像は定式化してきたと言っても過言ではないだろう。

しかし、アドルノが世界全体を偽りと見なし、規範的な基準を放棄していたという解釈には、議論の余地が残されているのではないだろうか。C・アルブレヒトらの研究が明らかにしているように、アドルノは、理論家として社会の矛盾を厳しく指摘しつつ、一方では、公的な知識人として戦後西ドイツの知的基盤づくりに大きな役割を果たしてきた。否定主義的な解釈をとる場合、こうしたアドルノの二つの側面は、矛盾するものに見えてしまう。

しかしながら、近年、M・ゼールに代表されるように、アドルノの否定哲学の核心に肯定性を読み取ろうとする研究が現れだしている。本報告では、こうした先行研究に示唆を受けつつ、アドルノの批判の中により良い未来へ向けた可能性を読み取ることを目指したい。

## フェミニスト・ペダゴジーの限界と転回：

### アフェクト理論がひらく教育空間

報告者：虎岩朋加（椋山女学園大学）

司会者：尾崎博美（東洋英和女学院大学）

かつて、フェミニスト・ペダゴジーは、権力関係の再生産や「自己」の強化を避けられず、したがって、既存の社会関係を維持するという深刻な限界に直面していた。特に、従来の言語中心の教育実践の枠内では、支配的言説の構造そのものを再生産してしまうという問題が指摘されてきた。しかし近年、フェミニスト・ペダゴジーは「アフェクト（情動）」という理論的問いを導入することで、新たな転回を遂げつつある。この転回は、支配的言説の再生産という構造的課題に対して、フェミニスト・ペダゴジーが理論的かつ実践的に応答する可能性を切り開いている。

本フォーラムではまず、アフェクト（情動）理論がフェミニスト・ペダゴジーに対し、言語による意味の伝達を超える、アフェクト（情動）が生み出す身体化される相互交流という視点をもたらす点を考察する。次に、この視点が自己の形成過程を再考する契機となることを論じる。その具体的な実践例として、「音（sound）」を中心におくフェミニスト・ペダゴジーの実践を取り上げる。これは、フェミニスト・ペダゴジーがアフェクト（情動）の次元を取り入れる複数のアプローチの一つである。

例えば、通常フェミニスト・ペダゴジーにおいて「声（voice）」と呼ばれるものは、エンパワーメントの概念と関連しているが、わたしたちが言説的に情報を獲得し伝達する現象以上のものを示している。実際、情報は、声のトーン、抑揚、リズムなどを通して伝達される。このような「声」の側面は、アフェクト（情動）によって生み出されるものであり、話し手の強度と感覚の産物である。

これは、「音」が統治性から自由であるという意味ではない。実際、言説を超えた「声」の側面を生み出すものであるアフェクト（情動）を、統治性の外部にあるもの、つまり支配的な主体の様式から完全に解放される手段と見なすべきではないことに注意することは重要である。それでもなお、アフェクト（情動）は、支配的言説によっていまだ完全に書き込まれていない空間を開く可能性をはらんでいる。

## 市民教育論における政治的リベラリズムの思想史

### ——その批判から超克まで——

報告者：中西亮太（東京大学）

司会者：平井悠介（筑波大学）

近年、市民教育論で注目される理論に「政治的リベラリズム」がある。政治的リベラリズムはジョン・ロールズが示した政治理論である。ロールズは次のような問題に取り組んだ。すなわち、多様な宗教的・哲学的・道徳的な世界観——包括的教説——によって考え方や生き方が分断している市民からなる公正で安定した社会が存続することはいかにして可能か。この問いにロールズは、従来のリベラリズムは包括的教説に過ぎず、現代社会の処方箋とはなりえないと考えた。そこで、多様な包括的教説を持つ人びとであっても共有できる価値や伝統に立脚し、熟議による政治的な合意に基づく社会構築を展開することとなる。

政治的リベラリズムでは独自の市民観や社会形成論が提示されることとなった。これを受け、市民教育論では政治的リベラリズムが熱心に受容され、2010年代以降には体系的な研究書も発表されるようになった。一方、政治理論においては2000年代までに政治的リベラリズム批判がすでに展開され切ったとも言える状況にあった。批判の中核は政治的リベラリズムの中立性をめぐらるものである。

では、このような批判を踏まえてなお政治的リベラリズムに基づく市民教育論は有効な理論と言えるのだろうか？ そこで本発表では、政治的リベラリズムおよびそれに基づく市民教育論の形成・批判・展開を教育思想史のコンテキストで引き取り考察することを目指す。これによって政治的リベラリズムに基づく市民教育論の射程を確定させ、さらなる展開可能性を模索したい。本発表では、まず政治的リベラリズムおよびそれに基づく市民教育論に向けられる批判を教育思想史の観点から前景化する。続けて、政治的リベラリズムの後継者たちによる再検討を踏まえながら、政治的リベラリズムに基づく市民教育論の射程を検討する。最後に、政治的リベラリズムを批判的に継承して登場した「ケイパビリティ・アプローチ」に触れ、新たな市民教育論の展開可能性を示唆する。

## 社会批判と教育学の関係を再考する

### —オスカー・ネクトを事例に—

企画者・司会者：藤井佳世（横浜国立大学）

報告者：井関正久（中央大学）

白銀夏樹（関西学院大学）

藤井佳世（横浜国立大学）

本コロキウムでは、批判理論と教育学の関係について、オスカー・ネクトの思想と実践から捉え直すことを目的とする。ネクトは学生運動と関わりがありつつも、68年世代より年長の「58年世代」としての自覚をもっており、労働運動をはじめ積極的に社会運動に携わってきた。また、ネクトは、フランクフルト大学で学び、テオドール・W・アドルノに師事し、学位論文を彼のもとで執筆した。さらに、彼は、ユルゲン・ハーバーマスとは異なる視点から、公共圏の思想を立ち上げた人物としても有名である。

フランクフルト学派としてよく知られる思想家とは一線を画しつつも、ネクトは当時の歴史・政治的状况の中で、公共圏と民主主義に関わる理論と実践に取り組んできた。とりわけ、彼がハノーファーにあるオルタナティブスクールの創設に深く関わったことは注目に値する。その学校は、私立学校ではなく公立学校のグロックゼー学校（Glocksee-Schule）である。教育と社会が地続きであることを踏まえ、初期の学校は、未だ社会で実現していないことを子どもたちの生活や学校の中で実現させようとするものの困難さを抱えていたように見える。そこで、本コロキウムでは、彼の思想と教育の実践について考えることを通して、批判的教育科学の更新につながる議論を行いたい。

## 日本における教育と技術への問い

企画者：神代健彦（京都教育大学）

司会者：門前斐紀（金沢星稷大学）

報告者：李 舜志（法政大学）

桑嶋晋平（日本女子大学）

神代健彦（京都教育大学）

指定討論者：奥井 遼（同志社大学）

技術革新が教育と社会のあり様を大きく変えつつある今日、教育思想研究はいかにあるべきか。求められるのは、「教育の本質」の別決だろうか。AI や ICT 技術を従属させる万古不易の本質概念を見定めることができるならば、なるほど教育思想研究の意義は疑いえないだろう。だが、ユク・ホイに言わせれば、技術を単なる手段とみなすのは誤っている。西洋近代の宇宙論の下にあるゲシュテルとしての現代テクノロジーは、技術の主（使用者）であろうとするわたしたちを、むしろ根本的に規定する。重要なのは、技術的実践を前提とした別様の宇宙論の再発明であり、そのことを通じた「技術の複数化」である。

本コロキウムでは、ユク・ホイの「宇宙技芸」をアンブレラ・ワードとしつつ、〈技術としての教育の思想〉というアイデアを深めることを目的とする。教育とテクノロジーを対置するのではなく、むしろ教育をいったんは現代テクノロジーを含めた技術という存在者の次元においてとらえ直すこと、そして教育思想をそうした技術（的実践）に関する宇宙論の複数性においてとらえることは、遠回りのように見えて、実のところ、技術革新の時代に相応しい教育とその思想の再発明に繋がるのではないか——この直観を確かめることが、本コロキウムの目指すところである。

## 発達論的時間概念の組み替えと高大共動システムの構築

企画者：須川公央（白梅学園大学）  
田中智輝（山口大学）  
司会者：村松 灯（帝京大学）  
報告者：小玉重夫（白梅学園大学）  
西谷咲希（白梅学園大学 3 年）  
周藤彩生（白梅学園大学 3 年）  
佐藤美涼（お茶の水女子大学 1 年）  
本橋朱彩（津田塾大学 1 年）  
窪田 睦（白梅学園高校 1 年）

これまでは、高等教育、中等教育、初等教育、乳幼児教育というヒエラルキーがあり、前者の就学準備の場に後者になるという構造であった。探究はこの構造を、乳幼児の創造性や好奇心、表現性が小学校の探究を活性化させ、それがさらに中学校や高校の探究の学習につながり、さらにそれが大学における学問研究のイノベーションを起こしていく、という関係構造へと転換させる可能性を持つ。このコロキウムでは、「過去から未来への固有の方向を持つ矢印としての時間という考え方」を組みかえ、「複数の時間性に宿り、互いが互いを可能にしあう共動的なシステム」(K. ムリス)として高校、大学の関係を捉え直していく可能性について、一つの高校の卒業生と在校生とともに、議論をしていく。

[付記]会費納入のお願いに同封した簡易版プログラムから、報告者に変更があります。

## 「大正新教育」の辺境へ

### —地域・芸術・宗教に着目して—

企画者：深田愛乃（日本学術振興会 特別研究員〔PD〕）

司会者：柏木 敦（立教大学）

報告者：菊地 虹（立教大学・院生）

北村 桜（立教大学・院生）

深田愛乃（日本学術振興会 特別研究員〔PD〕）

近年、大正新教育研究は、思想史的な意義づけや実践の実態解明に向けて着実に成果を蓄積してきた。しかし、その主な着眼点は、「大正新教育」の主流であった都市の官公立師範学校附属小学校や私立小学校にとどまる傾向にあることは否めない。

「大正新教育」のより広い捉え直しのためには、それぞれの地域性や学校種、ひいては社会教育までもふまえた「大正新教育」の受容・展開の特性を明らかにすることが必要であると考えられる。こうした問題関心を共有する報告者 3 名は、その特性を見定めるため、宗教や芸術という学校教育の周辺に置かれがちなものに焦点をあてることとし、今年度より研究会を開始した。本コロキウムは、今後の共同研究の助走となるものである。

報告では、北村は広島高等師範学校附属小学校で小原國芳の主導により全国的に初めて実施された「学校劇」を取り上げ、とりわけ小原とその周辺の教師との関係性に着目する。菊地は、山本鼎が先導した自由画教育運動や農民美術運動、そして自由大学運動が生まれた長野県上田市に着目し、地域と諸運動との相互的な影響関係を検討する。深田は、岩手県稗貫郡という山間地域の大迫尋常高等小学校でのドルトン・プラン導入の実態について、農業科と仏教的な修養法との関連性に着眼しながら論じる。司会は、教育制度政策史を専門とする柏木が担当する。学校教育の周辺を扱う報告者の視点を同時代の文脈に接続させることで、立体的な議論となることを目指したい。

## 民衆による知の生成を問う

### —戦後文化運動における「生活・記録・サークル」の思想史—

企画者：西本健吾（東海大学）

川上英明（山梨学院短期大学）

司会者：西本健吾（東海大学）

報告者：西本健吾（東海大学）

川上英明（山梨学院短期大学）

久島裕介（東北文教大学短期大学部）

指定討論者：町村悠香（町田市立国際版画美術館）

本コロキウムは生活・記録・サークルという三つの視点の交差から、1950年代から70年代頃までの戦後文化運動を検討し、そこでの民衆による知の生成のダイナミズムと限界を探る。

戦後史において1950年代は記録の時代として知られる。特に『山びこ学校』を基点とした生活記録運動は、民衆による同時代的な生活実践の記録であると同時に政治的・歴史的实践でもあった。それは、人びとによる「自己教育」とも表現される。また、サークルとは1950年代から60年代頃にかけて興隆した人びとによる集団活動であり、先に述べた生活記録運動の多くはサークルの共同性を母体にしてきた。そして、サークルも記録も多くは生活に根ざすものとして解釈される。それだけでなく、生活は体系化されざる知の苗床としても機能する。

生活・記録・サークルは互いに連関するものとして、しかしそれぞれに固有の思想的含意を有している。本コロキウムでは、西本が「鶴見俊輔のサークル論」について、久島が「山形県児童文化研究会という教育研究サークル」について、川上が「中井正一と山代巴との思想史的な関係性」についての各報告を通じてその内実について考察する。また、指定討論者として、民衆版画運動についての研究・展覧会企画を行なってきた町村悠香氏を招く。

【コロキウム 6】（第 2 日）対面のみ（14 号館 D601）

## 教養の弁証法？

### 『大正教養主義の成立と末路』合評会

企画者・司会者：森 祐亮（大阪大学）

報告者：栗原 悠（総合研究大学院大学／国文学研究資料館）

中野綾子（八洲学園大学）

本郷直人（慶應義塾大学・院生）

指定討論者：松井健人（東洋大学）

本企画は、教育思想史研究としても長らく対象とされてきた教養主義研究について、教養そのものの是非を問い直す、自由闊達な討議と交流を企図するものである。そのために今回は、近年精力的に教養研究を展開し、著作を上梓している松井健人会員（東洋大学）の本年度刊行著作『大正教養主義の成立と末路』の合評会を執り行う。それによって、狭義の教育学に限定されない、開かれた教育思想史の議論を行いたい。

今回は本書に対して、会員からは本郷直人会員（慶應義塾大学・院生）を、日本文学・日本思想史研究の視点からは中野綾子氏（八洲学園大学）、栗原悠氏（総合研究大学院大学／国文学研究資料館）をそれぞれ報告者としてお招きし、コメントを頂く。その上で、指定討論者として著者の松井健人会員からの応答を頂くことで、学会員内外そして領域を跨ぐ学際的な議論を展開していきたい。

## 没入・虚構・拍手

### ——教育とコミュニケーション・再考Ⅱ——

企画者・司会者：渡辺哲男（立教大学）

報告者：奥井 遼（同志社大学）

粕谷圭佑（奈良教育大学）

常深新平（慶應義塾大学・立教大学ほか非常勤）

中谷 森（津田塾大学）

指定討論者：渡辺健一郎（俳優、批評家）

昨年度の教育哲学会ラウンドテーブル「アイロニー・演劇・主体：教育とコミュニケーション・再考」の続篇である。演劇に関心のある研究者、実践者が集ってこの 6 年ほど続けている演劇研究会のメンバーが企画の母体であるが、このたびのコロキウムに先立って、新たなメンバーも加わっている。今回も、前回に続き、「教育」「演劇」「コミュニケーション」という三層それぞれのなかの「没入」「虚構」「拍手」といった概念の意義や役割を検討し、私たちの社会や文化にこれらの現象がどのような影響を与えているのかについて理解を深めることにしたい。

具体的には、観客の没入を誘う演劇の技法、拍手という行為が社会的活動の区分や現実と虚構の境界にいかように関与するか、などを検討課題とする。奥井は、自身がフィールドとしている人形劇における役者や観客を、粕谷は教育社会学研究の立場から、授業会話や授業場面の分析を、そして中谷は、シェイクスピア研究の成果を踏まえつつ、演出家・鈴木忠志の『リア王』論を、それぞれケースとして考察を行う。また常深は、メルロ＝ポンティの現象学を現代行為論と結びつけながら考察を深めたコマリーン・ロムデン＝ロムラックによる議論を手がかりとして、教育学的に有意義に作用している没入的体験について論じる。渡辺健一郎は今回指定討論者に回り、それぞれの報告を相対化しつつ、「没入」の定義、多様な領域において論じられる「没入」についてコメントを行う。

## シモーヌ・ヴェイユの不幸の美化についての考察

企画者：依田和晃（早稲田大学）

山口裕毅（兵庫県立大学）

報告者：依田和晃（早稲田大学）

司会者：山口裕毅（兵庫県立大学）

指定討論者：池田華子（大阪公立大学）

安喰勇平（神戸市外国語大学）

国内においてシモーヌ・ヴェイユについての哲学研究は 1960 年ごろから近年まで継続的になされているが、教育哲学者による研究はまだ限られたものしかない。

ヴェイユの哲学が教育哲学の中であまり議論されてこなかった理由はいくつか考えられるが、その主要な理由の一つはヴェイユが苦しみや不幸を美化しているのではないかという疑念を持たれていることである。実際ヴェイユの哲学においては、苦しみを通して自己を無にする必要が説かれている。その一方、刊行されている伝記をあたっても、彼女が自己犠牲を厭わず、不幸を求めて身に受けていたかのような印象を受けないでいるのは難しいし、最期は自殺ともみなされかねない死を遂げており、そうした人物像が上のような疑念を深めてしまっている。

本発表ではヴェイユは本当に不幸を美化しているのかを問うが、考察にあたって特に関連性の高いと思われる『不幸』と『脱創造』の二つの概念を取り上げる。考察の結果、ヴェイユはかなり限定的な範囲でのみ不幸を積極的に捉えているのであり、ヴェイユ哲学は不幸を美化するものだとする見方は拙速で、妥当なものではないと結論する。この点を明確にすることで、彼女の哲学が教育哲学の中でより広く議論されるための部分的な地ならしができればと期待している。

当日は、指定討論者である池田華子会員（大阪公立大学）にヴェイユ研究の視点から、安喰勇平会員（神戸市外国語大学）に受苦的な経験と思想形成の視点からコメントを頂戴し、その上で企画者の依田及び山口より、教育学のパトス論的転回の議論から論点を提示し、議論を重層的なものとする一方で、教育哲学における不幸と受苦的経験の教育的意義にかかわる研究の展望を参加者と議論したい。

【9月13日（土）11：40～12：50（14号館D301）】

## ランチタイムセッション

今大会では、教育思想史学会としては初めて、次世代の研究交流を趣旨とするランチタイムセッションを企画する運びとなりました。第1日目の昼食休憩の時間帯に開催いたします。現時点では、参加者全体をいくつかのグループにおいて、各グループで中心となるトピックを設けて自由にディスカッションをしていただく予定です。トピックの例は次のとおりです。

- ① 研究の進めかた（博士論文、論文投稿、学会発表 etc.）
- ② キャリア形成（進路・就職、授業づくり、申請書作成 etc.）
- ③ 研究会企画（学会大会終了後の交流の継続・発展 etc.）

それぞれのグループには、理事や編集委員など学会役員が1名ファシリテーター役として配置されますので、一定のキャリアを積んだ研究者の話聞くことも可能です。また、セッション中、グループを移動することも可能です。

軽食（パンを予定）と飲み物をご用意しますので、お昼を食べながら、フランクにお話しいただけます。みなさまの積極的なご参加をお待ちしています。

（ランチタイムセッション・ワーキンググループ：井谷信彦、河野桃子、学会事務局）

### 【参加希望調査へのご協力をお願いします】

おおよその参加人数の把握を行うため、事前の参加希望調査をさせていただきます。8月22日（金）までに、下記のGoogleフォームからご回答ください。本セッションで議論したいトピックがありましたら、併せてお知らせいただければ、ワーキンググループで検討させていただきます。なお、当日の「飛び入り」も可能です。

（参加希望調査フォーム）

<https://forms.gle/5b3q2Gehwph9wrT7A>

